

## 「狼の死刑宣告」

☆☆☆

2009（平成21）年10月12日鑑賞<テアトル梅田>

監督：ジェームズ・ワン

脚本：イアン・マッケンジー・ジェファーズ

原作：ブライアン・ガーフィールド『DEATH SENTENCE』

ニック・ヒューム（保険会社の副社長）／ケビン・ベーコン

ヘレン・ヒューム（ニックの妻）／ケリー・プレストン

ブレンダン・ヒューム（ニックの長男）／スチュアート・ラファティ

ルーカス・ヒューム（ニックの次男）／ジョーダン・ギャレット

ビリー・ダーリー（ギャングのボス）／ギャレット・ヘドランド

ジョー・ダーリー（ブレンダンを殺した少年、ビリーの弟）／マット・オリアリー

ボーンズ・ダーリー（ビリーの父親）／ジョン・グッドマン

ウォリス（黒人の女性刑事）／アイシャ・タイラー

2007年・アメリカ映画・106分

配給／ハピネット

### <裁判員裁判が始まる中、『さまよう刃』VS『狼の死刑宣告』>

2009年8月3日に第1号が始まった裁判員裁判は少しずつ定着しはじめているが、そんな中邦画の『さまよう刃』（09年）に続いて、ハリウッド作品『狼の死刑宣告』が公開。両方とも物騒なタイトルだが、その共通点は大切な家族が社会のダニ共によって理不尽かつ無惨に殺されたにもかかわらず、警察や裁判に頼ることができないため自ら犯人に対して鉄槌を下すというストーリー構成。こんな映画が流行るのは、裁判員裁判の定着を目指す今、困ったこと？もともと、アメリカではチャールズ・ブロンソン主演の『狼よさらば』（74年）という名作があり、これがヴィジランテ映画の元祖といわれているらしい。そして、本作は『狼よさらば』の原作『Death Wish』を書いた作家ブライアン・ガーフィールドがその続編的に書いた『DEATH SENTENCE』を映画化したものだ。

主演のケビン・ベーコンはチャールズ・ブロンソンほどの大物ではないが、私の大好きな映画『ワイルドシングス』（98年）での演技が強く印象に残っている名優。ケビン・ベーコン演ずる主人公ニック・ヒュームは保険会社の副社長で、妻ヘレン（ケリー・プレストン）、長男ブレンダン（スチュアート・ラファティ）、次男ルーカス（ジョーダン・ギャレット）と共に郊外の一軒家に住み幸せな家庭を築いていたが、そんなニックがなぜ狼に変身？

### <ジェームズ・ワン監督の演出力は？>

本作を演出したジェームズ・ワンは、現在第6作の公開が迫っている『SAW』シリーズ第1作の監督だが、彼は1977年生まれだからまだ32歳の若さ。そんな彼がなぜヴィジランテ映画に挑戦？32歳の彼に、家族を失った父親の気持がわかるの？

そんな心配をしながら物語がスタートしたが、冒頭のシーンは家族4人が楽しく過ごす時間のオンパレード。誕生日やクリスマスのたびに家族が集まって過ごす風景はハッピーそのものだ。もちろんこれはその後訪れる悲劇と対照させるためだが、若干演出過剰気味？

他方、映画後半はいかにもジェームズ・ワン監督らしく、銃社会のアメリカらしい派手な銃アクションを演出するが、その中で驚くのはニックのタフさ。保険会社の副社長という要職にありながら、ケビン・ベーコンのような体型を維持しているのはそれなりの努力があるのかもしれないが、『沈黙』シリーズのスティヴン・セガールのように武道で鍛えているわけではないはず。ところが、映画後半でみせるニックのタフさはもちろんアクションや格闘技のすばらしさはセガール級？この点でも演出過剰気味なところは否定できないが、それも所詮映画と割り切ればオーケー？

### <これでも司法取引が必要なの？>

アメリカは日本と違い「司法取引」が横行している国。しかし、ガソリンスタンドの売店内で、たまたまそこに立ち寄っていたニックの長男ブレンダンの喉をかき切って殺してしまった強盗団のチンピラであるジョー・ダーリー（マット・オリアリー）についても、司法取引が必要らしいことを知って私はビックリ。

最愛の息子を殺されたニックとその妻ヘレンが犯人に対して極刑を希望したのは当然だが、警察の話ではジョーに対して死刑や無期は到底無理らしい。つまり、犯行の様子が防犯カメラに記録されておらず、ジョーが返り血すら浴びておらず、目撃証人がニック一人だけという状況下では、陪審制の国アメリカでは殺人罪での公判維持は難しいというわけだ。法廷で証人として立つニックに対して「あなたの視力は？」という嫌味な質問や、ジョーには殺人の意思など全くなく、強盗団のボスから正式のメンバーになるための儀式だからやれと命令されて動いただけのかわいそうな立場だと弁護士が弁解すると、陪審員は無罪の評決を下す可能性が強いらしい。「そんなバカな！」と思う人は、自分が裁判員に選任された場合の対応を考えながら十分勉強する必要がある。

そんな中、「予審」段階で、裁判長から「あなたはこの少年が息子さんを殺したという証言を本裁判でも維持しますか？」と質問されたニックの答えは？それは、それまでの警察との打合せとは正反対の、「その場は暗かったので、この男が犯人かどうかわかりません」という意外なものだった。これにてジョーは直ちに釈放となったが、ニックはなぜそんな証言を？

### <不思議な予定調和 その1 警察の捜査は？>

水戸黄門をはじめ、世の中の勧善懲悪もののドラマはすべて予定調和の世界。また、セガール映画でセガールが絶対死なないように、ヴィジランテ映画もそれは同じ。この手の映画はそれを前提として楽しまなければダメなわけだ。

ニックが予審の法廷で裁判長に対してあんな証言をしたのは、その時点で『さまよう刃』の長峰のように、犯人への復讐＝私的制裁を決意していたため？そこらあたりのニックの心情をどう汲み取るかが本作のポイントの1つだが、最初のハイライトシーンとなるニックとジョーとの取っ組み合いの結末は？この時ニックはナイフを持って行ったのだから、殺人の故意があったと認定されても仕方ないが、さてその真相は？

ニックの長男ブレンダンを殺害しながら、いとも簡単に釈放された少年ジョーが胸にナイフをつきつけられて死亡したことについて、黒人の女性刑事ウォリス（アイシャ・タイラー）がニックに疑惑の目を向けたのは当然。しかし、ヴィジランテ映画では警察は常に控えめにするのがルール？そのためか、ジョー殺しについて警察のニックへの追及がおざなりなら、クライマックスシーンとなる強盗団とニックとの壮絶な「戦争」についても、警察はすべてが終わった後にやっと現場へ駆けつけるといふ体たらく。ホントはこれでは困るのだが、そんな予定調和の世界にどっぷり浸った警察の姿に注目。

### <不思議な予定調和 その2 ニックの体力は？>

本作は106分だが、映画が始まって80分くらいのところでビリー・ダーリー（ギャレット・ヘドランド）をリーダーとする強盗団への報復によって、警察に守られていたはずのニックたち一家がすべて惨殺されるシーンが登場する。直近のマシガン弾を何度もかいくぐってきたニックもここでついに拳銃の弾を受けてジ・エンドとなるわけだが、本作の物語のホントのスタートはここからだ。

瀕死の状態ベッドに横たわり、奇跡的に意識を回復したニックの体力回復は早い。植物人間状態になっている次男ルーカスと別れを告げた後、病院を脱出したニックは薬を飲みながら一人で服装を整え、ビリーとジョーの父親ボーンズ・ダーリー（ジョン・グッドマン）から3つの銃を買い求め、一人敢然とビリーたちへの復讐に向かうことになる。1960年代～70年代であれば、これは堪忍袋の緒が切れた鶴田浩二や高倉健そして高橋英樹らが颯爽と報復に向かうシーンで、「いよっ、健さん！」などの掛け声の1つも欲しいシーンだ。

あんなに瀕死の状態だったニックが、そんなチョー短期間でここまで体力が回復？そんな変な突っ込みを入れず、すべての予定調和を受け入れることがヴィジランテ映画鑑賞マナーだと割り切れれば、「いよっ、ニック、カッコいい！」